

半跏思惟像考

川崎 滋子

序

上代彫刻における半跏思惟像は、現在多く残されている。しかし、初め中国では悉達太子として、そして朝鮮半島では弥勒として尊ばれたこの像を、日本ではその殆どが、弥勒とみなされているが、一体どのような信仰を受けていたのかさだかでない。確かに野中寺像には弥勒と銘記されているが、一つの遺像で他の多くを規定することはできないと思われる。現に文献を調べても、半跏思惟像を救世観音、如意輪観音と称している例が見られる。山城大原三十三院本堂半跏思惟像の胎内納入品に救世観音と書かれていたなど、文献以外にそういった記録も残されている。

ここでは半跏思惟像と弥勒の造仏形式を発生からその流れを追いき、半跏思惟像をめぐる弥勒信仰と悉達太子信仰を考えてみたいと思う。

第一章 大陸における造仏の推移

一節 弥勒像

弥勒像は造仏がはじまるガンターラ・マトウラーの初期に、その

遺物を見ることが出来る。それらは如来形でありながら菩薩と称されていたことが、カトラ出土の仏陀像から判明している。^(注1)このような混合形式が行なわれたのは、釈迦の後に如来となる弥勒の当来仏としての性格からきたものと思われる。

古代インドにおいて弥勒は水瓶を持物とし、東インドのパール朝では蓮華と宝冠に小塔(ストゥーパ)が現われ、弥勒像の判定のめやすとされている。しかし、水瓶、蓮華は観音の持物でもあるので、これだけでは弥勒像と判定するのは不可能である。印相は主に右手施無畏、左手触地印又は膝上で衣端を、握っているのが多く見られる。クシャーナ朝からグプタ朝にかけて、弥勒は倚座垂脚の仏陀像として表わされ非常に多く造られるようになっていった。

インドから中国への弥勒信仰の伝来経路は、西域を通過していったらしい。「大慈恩寺三藏法師伝」^(注2)「法苑珠林」^(注3)によると西域での弥勒信仰が隆盛を極めていたことがわかる。又、弥勒經典の最初の漢訳者、竺護法が敦煌出身であることから、西域経路であったとうかがえる。

中国に弥勒信仰が伝えられたのは、遅くとも四世紀後半であり、五世紀中葉には北魏を中心に本格的に信仰され、造仏もかなり盛んであったらしい。しかし、北魏でどのような図像を基に造仏されていたかは、典拠となる弥勒六部経^(注4)に形相が定められていないため遺物から考えるしかない。

在銘弥勒像では最も古い作例として、雲岡第十七洞太和十三年(四八九)の交脚菩薩像があげられる。北魏の造仏の中心である雲岡竜門には多くの交脚菩薩像が見られ、その銘文から見て弥勒として造られた例が多い。水野清一氏は交脚菩薩すなわち弥勒像であるといわ

(注6) 宝冠の化仏によって観音とする説もあり定説はない。しかし、竜門の交脚菩薩像は元左右に一对の獅子が従っていることが注意をひく。獅子は元來釈迦の象徴であり、獅子が台座についていれば古代においては釈迦と見なされていた。しかし、「觀彌勒菩薩兜率天經」に「時ニ兜率天ノ七宝内摩尼殿上ノ獅子床座ニ忽然トシテ化生ス」とあるので、彌勒が獅子を台座に従えることは不思議ではない。又彌勒が當來仏であることから釈迦と同様の扱いを受けるということも考えられるため、私は台座に獅子を従えた交脚菩薩像は彌勒と考えて良いと思う。

この交脚菩薩像の印相はインドにおける彌勒像と同様に、右手施無畏印、左手触地印又は膝上で衣の端を握っている。しかし、宝冠小塔、左手執蓮華は中国では見られない。だが、中国では北魏末から交脚菩薩像を二軀一对として造立することがあった。こうした安置法は觀音像や半跏思惟像でも行なわれており、その根拠は明らかではないが、単なる造型的な理由ではないらしい。

北斉以降から兩脚を真直におろす倚座垂脚像が彌勒として造りはじめられる。雲岡にも倚座垂脚像が見られるが、彌勒として造られたのではないらしい。この像は隋から唐にかけて盛んに造仏されたが、彌勒として広く造仏されるのは唐に入ってからである。又、唐以降も倚座垂脚像は彌勒だけとは限られず、阿彌陀としても造られていたらしい。旧四十八体仏中の山田殿像は、その脇侍から阿彌陀と考えられており、近年発掘された河原寺からも阿彌陀と刻まれた薄仏の倚座垂脚像も出土したように日本でもその遺物が残されている。

雲岡等の交脚菩薩像の銘文を調べると、その信仰は迫善供養的な

(注7) 上生信仰で、それも阿彌陀の極樂と兜率天が混合されているらしい。又、北斉末の武平元年正月二十六日の造像記のある倚座垂脚像の銘文を見ると、ここに見られる信仰は下生信仰であるが、この倚座像は如來形をとらず菩薩像である。これは交脚菩薩像の変型とも見られ、如來形の倚座垂脚像への変遷を物語っているのかもしれない。又、明確に下生信仰が銘文にあることを考えると造仏の変遷と共に信仰の交替が行なわれたのではないかと考えられる。

二節 半跏思惟像

半跏思惟像は雲岡石窟で交脚菩薩像の兩脇侍として初めてあらわれ、それ以降多く造仏されたが大部分は独立の仏像の脇侍として見られる。曇曜(注10)五窟の一つである第十六洞に四軀の半跏思惟像があるため雲岡造像の初期から造られていたことがわかる。

第六洞明窓の右に見られる半跏思惟像にはうづくまる馬と山嶽とが共に刻まれている。これは出城後、悉達太子が愛馬カントカと別れる仏伝中の一場面と思われる。こうした半跏思惟像と馬のとりあわせは他にも多く見られ、馬だけでなく従者シャノクタの姿が表わされることも多い(注11)。出家前の釈迦は「過去現在因果經」にもあるように、病者や死者又は比丘を見ては思惟しており、出家に臨んでも思惟を重ねている。このように思惟苦惱は悉達太子の根本的性行であることから太子を半跏思惟像で表わしたと思われる。

北斉頃に河北定県附近に見られる中山派とも呼ばれる白玉製(白大理石)半跏思惟像には多く樹木が配されている。樹木の配された(注12)半跏思惟像は雲岡第九・十洞や竜門の魏字洞にも数例見られるが、

中山派の半跏思惟像には竜樹思惟像と銘記(注13)されている。この竜樹で思いあたるのは弥勒の竜華三会(注14)である。釈迦が思惟し成仏した所は菩提樹下であり、もしこれらの像が悉達太子像であるなら菩提樹思惟像とされるはずだから、この竜樹思惟像は竜華樹下の弥勒とみることがができる。朝鮮半島と日本で半跏思惟像を弥勒とみなしていたとすれば、その根源は北斉頃のこれらの半跏思惟像に、起因するのではないかと思われる。中国における半跏思惟像は、その様式が続く隋に至るまで主に悉達太子像として造られたと見る方が正しく、半跏思惟像が弥勒として造られたのは倚座垂脚像が弥勒として造られる以前、北斉に限られていたと考えられるのではないだろうか。交脚菩薩の両脇侍として半跏思惟像が多く造られていたことから、交脚菩薩と倚座垂脚像の交替期に交脚菩薩像と半跏思惟像が混在した時代や場所があったということも充分考えられると思うからである。

半跏思惟像の朝鮮半島への伝来は高句麗より始まったと考えられる。高句麗は仏教伝来も他の百濟、新羅より早く三七二年前秦より、百濟は十二年後の三八四年に東晋から公伝している。新羅は大分両国より遅れ、六世紀前半に高句麗より伝わったらしい。半跏思惟像の伝来も仏教伝来の順を踏まえたと考えられるが、残念ながら三国時代の仏教に関する史料がほとんど残されていないため、わづかながらも現存する新羅の史料を中心に考えていくしかない。

河北の中山派による弥勒の半跏思惟像は六世紀後半以降行なわれていたらしいので、朝鮮半島に半跏思惟像が伝来したのは六世紀後半頃と見られる。この像は朝鮮半島の人々の嗜好に適したのか、三国時代の造仏に大きな比重を占めたらしく遺像が多く出土してい

る。しかし、統一以降衰退したのかあまり造られなくなっていた。朝鮮半島で半跏思惟像が、どの尊像名で造仏されたかは現存している像の中に銘文等で尊像名の入ったものがないため、推測の域を脱し得ない。だが、北魏における悉達太子半跏思惟像も半島に伝わってきたはずであろうし、中山派の弥勒半跏思惟像も河北に近い高句麗から広まったという可能性も充分考えられる。田村円澄氏は半島でこの像は弥勒として主に造られたとされ、その宗教的又は社会的背景には新羅花郎制度(注15)が大きく存在したのではないかとわ(注16)れている。田村氏は花郎制度が弥勒信仰を受け入れ制度を確立した真興王治世(五四〇—五七五)と、弥勒半跏思惟像が伝来した六世紀後半がほぼ同時代であることからこの説を打ちだしておられるが、果してそれだけで花郎と半跏思惟像が結びついたといえるだろうか。

花郎制度における弥勒信仰は、この集団の中心者の花郎を弥勒の下生したものとしてみることから明らかに下生信仰である。中山派の半跏思惟像が弥勒として造仏されたのは、釈迦の出家以前、修業中の身である悉達太子と将来如来となるべく兜率天で修業を続ける弥勒のイメージを重ねたからではないかと考えられる。弥勒が釈迦と同様の扱いを受ける例はインドにおいて、又雲岡での交脚菩薩像の一对の獅子においても見られた。兜率天で五十六億七千万年後に下生するまで、思惟を続ける弥勒の姿を表わしたのであればこれは上生信仰である。雲岡での交脚菩薩像は銘文からいっても追善的要素はあるが、明らかに上生信仰であり兜率天での弥勒を表わしたのもと思われる。このことから弥勒半跏思惟像は上生信仰によって造仏されたと考えられる。

中国では信仰の交替期と平行したように、造仏形式の交替も行なわれている。弥勒は如来となり人々の救済に下生するため、下生信仰では如来形をとるのが適切であろう。しかし信仰の交替期には今まで述べたように、造仏形式の混合が行なわれていたであろう。このため花郎制度と弥勒信仰が結びついた後、しばらくは如来形と菩薩形が並立して行なわれていたのではないだろうか。しかし、それは下生信仰が広まると共に消え如来形の弥勒が花郎制度と強く結びついていったと考えられるのではないだろうか。現に統一に巧勞のあった武將で名高い花郎でもあった金庚信の修業場といわれる断石山神仙庵には、磨崖の半跏像と本尊如来立像の弥勒三尊像がまつられている。

では朝鮮半島における上生信仰と下生信仰の伝来は別々であったのか、又別々としたほどの程度の間隔をもって伝来したのであるか。北斉（五五九〜五七五）に河北で弥勒半跏思惟像が造られるようになり、倚座垂脚像は北斉末頃に弥勒としての信仰がおこり隋・唐に盛んに造られていた。北斉滅亡後、弥勒半跏思惟像は中国では見られなくなるので、高句麗へは北斉の滅亡前に伝来されていたのであろう。下生信仰と花郎制度の結びつきは、五六七年に司臺者が女性二人から美貌の男子へと移った後に行なわれたと思われる。つまり男子の司臺者に変った後、下生信仰が伝来しこれと結びついたのではないかと考えられるのである。そして、下生信仰以前六世紀後半から末葉あたりまでの少なくとも二十年位に、弥勒半跏思惟像の上生信仰が行なわれていたのではないだろうか。

数少ない現存の半跏思惟像を見ると六世紀末に造られたものが多く、七世紀中葉と考えられる像是韓国国立博物館慶州分館にある石

像菩薩半跏像と忠清南端山の磨崖像があげられる程度で、それ以降の造仏は見られない。朝鮮半島において最も美しく半跏思惟様式の完成された像といわれる旧徳寿宮像でさえ、七世紀前半の作とされていることも、上生信仰が初めに行なわれた後に下生信仰が伝来し、国家的団体の花郎と結びついて急速に下生信仰が発展していったことのあらわれと見られる。

ここで考えなくてはならないのは、朝鮮半島の半跏思惟像はすべて弥勒かということである。現在、半島の遺物で六世紀半を朔上るものは発見されていない。これは中山派の弥勒半跏思惟像の伝来以降の遺物であり、それ以前には悉達太子としての半跏思惟像は伝来しなかったということになるかもしれない。しかし造仏様式を見ると、六世紀半ばすぎの伝平壤出土の金銅半跏思惟像は東魏初期の半跏思惟像に似ており、その他にも一光三尊形式が高句麗より朝鮮半島に広まったことも北魏末東魏初期にその源流が見られ、高句麗にかなり中国の仏教文化が伝えられていたことがわかる。中でも前述の金銅半跏思惟像が東魏の作と似ていることは北斉の弥勒半跏思惟像も半島の人々は知っていたということにならないだろうか。この東魏様の扁平腹身の半跏思惟像は、高句麗のみならず百濟・新羅でも遺物が残されている。仏教伝来より間もなく戦乱の続く三国時代には確固とした朝鮮半島独自のものを作り出す時間がなく、中国の直模が行なわれていた可能性は大きい。とすれば、やはり様式だけでなく尊像名も伝来していたと私は思う。又前述の通り銘文中に尊像名が刻まれていないことから、その可能性は大きいと思われる。

三国時代はその名の如く朝鮮半島内が三国に分かれ勢力争いをくり返した戦乱の時代であった。このことからこの時代の半島内の文

化を三つに考ふる説もあるが、陸つづぎの半島内で島国同士のよう

に造仏様式や宗教面に歴然とした差が生じるとは考えられない。戦

乱で国交が断絶していたと説かれても、この戦乱であったが故に文

化の交流が行なわれたのではないかと思う。高句麗から新羅への仏

教公伝や、前述の扁平瘦身の遺像が高句麗だけでなく百濟、新羅に

見られることから、文化的交流がかなり行なわれていたことがう

かがえられる。戦乱は捕えた他国の工人を寺院建立に従事させる

という形で文化的交流をより具体的にすすめたともいえるのではない

だろうか。このため高句麗で悉達太子の半跏思惟像が造られたとす

れば百濟・新羅にも伝来もされていたと考えられる。

しかし水野清一氏の御指摘のように、朝鮮半島に広くこの半跏思

惟像が造られたのは、とりもなおさずこの様式が弥勒像であったが

ためであろう。悉達太子半跏思惟像より弥勒半跏思惟像の方が圧倒

的にもはやされたということは、弥勒上生信仰が消えていった統

一新羅以降その姿が見られなくなったことと、新羅花郎制度に代表

される弥勒信仰から考えられるからである。

第二章 日本における半跏思惟像

一節 敏達十三年将来弥勒石仏

日本の飛鳥・白鳳期には半跏思惟像の秀れた作例が多く見られ

る。旧四十八体仏中(注19)に九体(他に半跏像一体)、中宮寺像、広隆寺

宝冠弥勒像並びに宝髻半跏思惟像、神野寺像、野中寺像等をあげる

ことができる。これらの像は、中国、朝鮮半島とその影響を多く受

けながら日本に伝来し、又造仏されたものである。

仏教公伝から「日本書紀」に記載された仏像を、あげてみると次

のようになる。

欽明十三年十月 仏教公伝、釈迦金銅像(船載)

欽明十四年五月 吉野寺放光樟像 (造仏)

敏達八年十月 新羅仏像獻上 (船載)

同 十三年九月 鹿深臣、弥勒石仏将来(船載)

四番目に弥勒像将来があらわれる。しかし、これらの年号は必ずし

も正確なものとは限らない。第一に仏教公伝は、「日本書紀」では

欽明十三年(五五二)となっているが、他の文獻「元興寺伽藍縁起

并流記資財帳」、「上宮聖徳法王帝説」を見ると欽明七年戊午の歳

(五三八)と少しさかのぼっている。又、「日本書紀」に記載されて

はいないが、私的に仏像の将来は帰化人等によって行なわれていた

であろうことは想像にかたくない。ともあれ弥勒像に関する文獻上

の記載は、この鹿深臣将来の敏達十三年が最も古い文獻上の記録で

ある。

この弥勒像について「泉高父私記」に引くところの「巡礼記」法

興寺(現飛鳥寺)の条に、

「十三年春二月蘇我大臣、始造此寺。北僧坊弥勒石像一尺許。居

足下。是日本最初仏也。」とある。但し、「日本書紀」は敏達十三年

から約百四十年後の養老四年(七二〇)に書かれているので、本当

に弥勒像であったと信じることに少し疑問がある。しかし「泉高

父私記」から見ても、日本最初の将来弥勒像と考えて差しつかえな

いと思う。

この弥勒石像について「日本書紀」は次のように述べている。

「秋九月、從百濟來鹿深臣^{鹿深}。有彌勒石像一軀。佐伯連^連。有仏像一軀。一中略。馬子独依^{馬子}、弘法、崇敬三尼。乃以三尼、付永田直与^{永田}、達等、令供^供衣食。經菅仏殿於宅東方、安置彌勒石像。屈請三尼、大会齋^齋。」しかし、この石像がどのような姿で表わされていたのか、この記載は何も語っていない。この日本最初の彌勒像によつて、その後の日本における彌勒像の形態がほぼ定まつていくことは充分考えられるし、全てを規定できなくともある程度左右はしえたと思われる。又、この像が半跏思惟像であつたかどうかで、その後の彌勒像の展開が推測できる。そのためにも今ここで敏達十三年彌勒石像の形態について触れておかなければならないだろう。

「上宮太子拾遺記」の第二巻に引く「泉高父私記」にこの石像について、やや詳細な記載がある。

「或人云、件石像長一尺余。或ハ。七寸。坐像也。色白極固。面貌奇麗耳。文」

ここでわかることが四点ある。

第一点、法量が一尺余、又は七八寸。

第二点、坐像である。

第三点、白く大変固い用材である。

第四点、面貌が奇麗である。

これら四点を踏まえて藤沢一夫氏は、この彌勒石像を半跏思惟像と論証されている^(注20)。以下、藤沢氏の論考に沿つて述べていく。

上記四点を考へて不思議に感じるのが第三点である。色が白いと云うのは何の疑問もないが「極固」という言葉が気になる。「泉高父私記」が書かれたのは保元三年(一一五八)以前である。平安末

期は貴族政權から武士政權に移る混乱期であり、人々は宗教に心の依り所を求め浄土教が胎頭し始めた時代でもある。このような時代に、信仰の的たる仏像の硬度を調べるような不遜なことがされたであろうか。造仏の際に仏師が硬材であることを書き示したならともかく、このような將來仏にはこれもあてはまらない。この記事の「極固」は、その上の「色白」と同じく視覚的なことではないかと思われる。

百濟を始めとして三国時代には木彫の仏像はなく、主として金銅製と滑石製で造られた。中でも滑石製の仏像は金銅製より多く造られたら^(注21)。扶余では多くの滑石像の出土が見られた。第三点にある「色白」という言葉は滑石の乳白色と合致しているが、滑石は「極固」ではなく細工しやすい性質である。この「極固」にはあまり信憑性がないとすればこの彌勒石像が滑石製という可能性もあり得る。ここで次の第四点を見ると「面貌奇麗」とある。この奇麗という言葉は、古語では容貌が端整であるという意味ではなく、潔いとかさっぱり、残りのないという意味である。これは製作の精巧さを示すものではないだろうか。緻密で光沢ある滑石仏像のあの冷やかな肌^(注22)に潔いとか、さっぱりという言葉が適しているように思える。

さて、形態に関する第二点にはただ坐像としか書かれていない。そこで、この像に関する文献を探すと意外と多くあるのに驚いた。前節にも引用した「巡礼記」に見る如く、この像は馬子邸宅の東方に祀られた後、法興寺へ移されたらしい。その後法興寺から元興寺へ、そして元興寺から多武峰へと転々としたことが文献上から推測^(注23)できる。彌勒石像について私が見ただけでも二十に近い文献が残っ

ている。これらの文献から弥勒石像の形態に関する記事を見ていくと、「巡礼記」に「北僧坊弥勒石像一尺許。居足下。」とある。居足下、すなわち坐像で足を下げていることらしい。ここで考えられるのは倚座垂脚像と交脚菩薩像、半跏思惟像の三種である。倚座垂脚像の弥勒像が中国に表われ始めたのは、五七〇年頃であるので、敏達十三年の五八四年に日本将来ということは少し無理があるように思える。又、交脚菩薩像は朝鮮半島には余り見られない形式であるので、これも将来石像にはあてはまらないように思う。第三の半跏思惟像は朝鮮半島において、弥勒像としても造られており人々の嗜好に適ったものでもあったらしいことは、前章第二節に述べた通りである。又、伝来の五八四年は朝鮮半島に下生信仰が伝わる頃で、まだ上生信仰が盛んに行なわれていたと思われる。伝慶尚北道安東出土の金銅半跏思惟像の造仏もこの頃と思われる。朝鮮半島における半跏思惟像の造仏初期の頃ともいえる。このために将来石像が半跏思惟形であっても不思議はないのだろうか。

鎌倉時代の橋寺僧法空による「聖徳太子平氏雜勘文」上二の三十三
年秋九月の条に次のような記事が見られる。

「親拝_二伴之尊像之所、無_二風勢_一救世観音之像也。不可思議事。比事真言宗有_三秘藏習可_一聞_二口説_一。法空はみずからこの像を拜して、救世観音像であったと驚いている。何故法空は弥勒石像を救世観音と見たのか。それを知るために鎌倉時代の救世観音像を調べてみる必要がある。

山城大原三千院本堂の半跏思惟像の胎内に納入されていた寛元四年（一二四六）の造像文書には「南無救世観音菩薩」と記されてあった。又「聖徳太子伝私記」上巻、上宮王院の条には有名な夢殿内

の救世観音について次のように書いてある。「或云_二三臂如意輪_一。中略。惣太子所_レ造如意輪之形像。」又、同じ条の裏書には、「但太子所_レ造救世観音像者、坐_二蓮華座_一以_二左手_一請_二御顔_一。以_二右手_一押_二右甲膝_一。比形像。金堂教跡有_二之_一。如_二天王寺金堂之像也。」と更に詳細に書かれている。夢殿救世観音がどのような形式をとっているかは今日では周知の如くであるが、この記事は鎌倉時代の救世観音像を知る大きな手がかりを与えている。蓮華座に坐し左手を膝におく形は思惟像を示すと思われる。金堂内に教体見られるというのは旧四十八体仏中の半跏思惟像を指すのではないか。現在、これらの像は法隆寺献納宝物として東京国立博物館にあるが、この中で思惟像に一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四（法隆寺献納宝物目録）による。以下同じ。）と九体見られ、その他に半跏像が一体ある。この半跏像に似たものが四天王寺金堂之像として「別尊雜記」に記載されている。この両像は右手施無畏印と長袖、高冠であらわされている。しかし、二臂の如意輪とも書かれている所や裏書の描写からも、ここにおける救世観音は半跏思惟像の方を考えて良いと思われる。

半跏思惟像の方に目をかえてみると、ここでも「別尊雜記」の四天王寺半跏像は「太子伝玉林抄」巻八に引く延暦二十二年（八〇三）の四天王寺流記資材帳である「大同縁起」の金堂の条に「弥勒菩薩一軀_座蓮華。」とされていたのが、寛弘四年頃の「四天王寺御手印縁起」には同一の半跏像は「金銅救世観音一体。」となっている。しかし、寛平二年の「広隆寺資財交替実録帳」には現存の宝冠半跏思惟像を弥勒菩薩としているので、平安後期の少なくとも寛平二年（八九〇）まで弥勒とされていた半跏思惟像が、約百年後の寛弘四

年（一〇〇七）頃には救世観音と信じられていたことがわかる。法空が救世観音と見た弥勒石像は、このことから半跏思惟像だったかもしれないと思われる。

最後に第一点の法量について考えてみたい。第二、第三、第四点から将来石像は滑石製の半跏思惟像ではないかと論旨をすすめてきたが、ここで滑石製の半跏思惟像の法量が百濟将来の弥勒像にあてはまるか、扶余出土の二軀の半跏思惟像をあげて比較してみたい。扶余出土の二軀は腰部から下だけしか残っていないので総高を知るために、日本に現存する半跏思惟像を例にとりこの例から復原した総高をとりあげる。例にしたのは野中寺丙寅年銘像と四天王寺金銅仏である。

四天王寺像 総高七、二寸 腰迄高三、四五寸。



図一 野中寺像

野中寺像 総高一〇、二寸 腰迄高五、四寸。
扶余出土滑石像腰迄の高さは四、一五寸であり前の二例から復原すると、

四天王寺像依拠復原総高 八、六六寸。

野中寺像依拠復原総高 七、七七寸。^(注25)

「泉高父私記」には一尺余又は八七寸とある所から、この扶余出土の滑石像とはほぼ同じ総高をもっていたと思われる。これからも、敏達十三年の弥勒石像が滑石製半跏思惟像と考えられる根拠となり得ると思う。

これら四点から私は敏達十三年将来の弥勒石像は藤沢一夫氏のいわれるように半跏思惟像であろうと考える。

二節 在銘半跏思惟像

日本の飛鳥、白鳳の半跏思惟像で銘文のあるものはほとんどない。わづかに野中寺像の丙寅年銘弥勒像と旧四十八体仏中の一五六号の高屋大夫銘像に残るだけである。そのため半跏思惟像が日本で何仏として造仏されたか正確にはわかっていない。

銘文をもつ半跏思惟像二軀のうち、特に野中寺像は作年と仏名が銘記されているので基準作として重視される。

「歳次丙寅年四月大朔八日癸卯開記栢寺智識□等詣中宮天皇大御身勞坐□時誓願□奉弥勒御像也友等人数一百十八是依六道四生人等比数可相□也。」銘文の丙寅年は天智五年（六六六）にあてられている。四月八日が「癸卯開」にあてはまるのは天智五年の丙寅年だけであるので、この作年は確実なものと思われる。この年に栢寺の



図二 高屋大夫銘像

智識百十八人により、中宮天皇の病氣平癒のため造仏されたとあるが、寺名の栢の意味がはつきりしないため何寺であるか論争が色々とおこなわれている。その多くは橘寺であろうということに帰結している。十一世紀後半、法隆寺の「金堂仏像等目録」によれば、橘寺から小金銅仏四十九体が移入されているとある。これらが旧四十八体仏の大部分をなすものであるかと考えられるが、これからわかるように橘寺には多くの小金銅仏が祀られていたと思われる。寺運衰えた橘寺から法隆寺に小金銅仏が移転した際に、二寺と同様聖徳太子信仰の盛んであった野中寺へも、小金銅仏の移転が行なわれたという可能性があるとす説もある。^(注28)しかし、現在では栢寺が橘寺をさすという確証がないため何ともいえない。又、銘文中の中宮天皇は齊明天皇と孝徳天皇妃の間人皇女のどちらをさしているのかもわからず、まだこの銘文についての疑問は多い。

在銘半跏思惟像のもう一つの作例高屋大夫銘半跏思惟像の銘文を考えてみよう。

「歳次丙寅正月生十八日記高屋大夫為分韓婦夫人名阿麻古願南無頂礼作奏也。」高屋大夫が死に分かれた夫人のために造仏したとあり、ここには浄土を願う信仰が見られる。浄土信仰には阿弥陀の極楽と弥勒の兜率天が考えられる。阿弥陀は飛鳥時代には、すでに伝来していたと思われるが文献的には確証はない。又、阿弥陀を半跏思惟像で造仏した例は大陸にも見られないので、この在銘半跏思惟像は弥勒像と考えて良いと思う。

さて、この銘文中問題となるのは、「歳次丙寅年」を推古十四年(六〇六)とするか、又は天智五年(六六六)にとるかということである。野中寺弥勒像が天智五年作と定められることを基に考えてみると、あまりに両像の様式が異なる点から同年の作と考えられるという説が多くある。^(注31)高屋大夫像は野中寺像と比べるとなく飛鳥彫刻としても異色の造仏とされている。額の広濶さ、眉目が大きくつりあがり頬骨が著しく張りそして耳朶の粗朴さなど、止利様式とは異なり北魏末から東魏の様式であり特に眉目のつりあがった所は、旧四十八体仏の他の像には見られないものである。又、肢体も極めて細く、この像に似た例は朝鮮半島の徳寿宮蔵の瘦身の銅造半跏思惟像に認められ、腰を細く緊蹙した様は朝鮮三国時代の半跏思惟像に類似している。その上、日本の他の小金銅仏のように台座が八角形や円形ではなく方形をしている所からも、同じく旧四十八体仏の一五八像と共に朝鮮半島からの將來仏のように考えられる。しかし、銘文に見られる高屋大夫という名が日本人らしいこと、珠更のように「韓婦」と記されていること、又この銘文が日本の様式

に則っていることから、日本で造られた可能性が高い。大陸で造
仏の後、日本に将来されて銘文が入れられたという可能性は刻字の
中に鍍金が認められることから考えられないと思われる。

野中寺像は体軀に比べ頭部や手足が大きく古様が残っているが、
丸味を帯びた顔やくぼみの入った背筋などの肉どりが自然になり、
写実性が強くなっていく。又、(注32)両脚の正面を帯状につくり、そこに
半花文を刻んだり、裳の縁に連珠文をいれるなど衣文の表現に新し
い感覚がみられ、おそらく齊周、隋あたりの様式の影響を受けたも
のらしい。このように、朝鮮三国時代の影響を強く受けた古様の仏
像と隋様式のものが同年に造られたとは考えられないとして、町田
甲一氏は高屋大夫銘像は推古十四年の作とすることを支持しておら
れる。

それに対して大夫という官名は大宝律令施行(七〇三)以降に用
いられたことから天智五年をとる説がある。(注33)最近、大夫は推古朝ま
で充分さかのぼれるとされてきたが、高屋大夫の地位がやや低いも
のだったとすれば、むしろ天智五年の方が妥当と思われる。この高
屋大夫という人は河内の古市附近の豪族であるらしい。古市は近く
の高屋丘陵の安閑天皇陵から瑠璃碗が、古市西琳寺からは飛鳥瓦が
出土するなど王仁系の西文の文化圏であったことが実証されてい
る。(注34)

野中寺像が橘寺の智識により造仏されたのであれば、大化改新以
後の新文化にいち早く触れていたのではないだろうか。飛鳥時代は
町田甲一氏の説に従い改新後を飛鳥後期とみなし、天智九年(六七
〇)の法隆寺焼失により白鳳時代に移ると考えれば、天智五年は白
鳳に入っている四年前である。文化の転換期の直前には新様式とそれま

での旧様式が混在している時でもあり、政治の中心地は文化の撰取
にしても積極的にあつたと考えられる。一方少し中心から離れた地
方で、特にその地方独特の文化をもっていたならば保守的になるの
は現在と大差なく、高屋大夫が王仁系の帰化人であれば祖国の文化
を固持することは充分考えられる。そうすれば、同年に異なる様式
の仏像が造られたのは不思議ではない。古代においては、たとえ同
国内でも文化の伝達はそれほど素早いものであつたとは思えない。
このため、様式の差はあっても野中寺像と高屋大夫銘像の二体は天
智五年作という説を私はとりた。

同年に弥勒半跏思惟像が二体それも飛鳥と河内といった離れた場
所で造仏されたという事はかなり広範囲に弥勒半跏思惟像の信仰が
行なわれたことを示すものだと思われる。しかも、多く残されてい
る半跏思惟像の中で銘文のある二体が両方とも弥勒像ということ
は、この信仰がかなり盛んであつたと考えてよいかと思う。

敏達十三年の弥勒石像将来より、この二体の在銘半跏思惟像の造
仏まで、およそ八十年の歳月がある。この間の半跏思惟像が、どの
ようなものであつたのかということについては、新しく節を設けて
述べていきたい。

三節 飛鳥・白鳳の半跏思惟像

敏達天皇期から野中寺丙寅年銘像、高屋大夫銘像の造られた天智
五年までの約八十年間に、かなり多くの半跏思惟像が造られていた
ことは現存の作品から考えられる。

「日本書紀」の推古十一年の条に、

「十一年己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊仏像、誰得是像、以恭拜、時奏造河勝進日、臣之拜。便受三仏像。因以造蜂岡寺。」の記載がある。この蜂岡寺は秦河勝が聖徳太子入滅後、その菩提を弔うため建立した広隆寺で別に太秦寺とも称される。この仏像については寛平二年（八九〇）の「広隆寺資材校替実録帳」の「檢皮茸五間金堂卷字」の条に書かれている。

「金色弥勒菩薩像、居高二尺八寸、所謂太子本願御形。」広隆寺には二体の半跏思惟像があり、その一体の宝冠弥勒像と称される仏像を前述の「尊仏像」にあてはめている。「居高二尺八寸」が宝冠弥勒像の実測像高二尺七寸六分とほぼ等しいためである。宝冠弥勒像の用材が小原二郎氏により近年アカマツと実証された。上代日本ではアカマツを造仏に用いることはなく、樟が用材であり彫刻材にアカマツを用いるのは朝鮮半島で行なわれていた。宝冠弥勒像に酷似した像として旧徳寿宮像があげられることから将来仏という説がでている。この両像の上半身は瓜二つと違ってよいほど似ている。ただ広隆寺像は懸裳が形式化されており、旧徳寿宮像の方が自然になっている。懸裳ばかりでなくモデリングも旧徳寿宮像の方がより自然に近く写実的になっているので、宝冠弥勒像の方が古様であるといえる。この両半跏思惟像の宝冠は日本でもあまり類のない簡素化された形をしているが、朝鮮半島では金剛泰氏蔵とソウル市金東鉞氏蔵の半跏思惟像の作例をあげることができる。このような点からも朝鮮半島将来仏といえるのかもしれない。

しかし、用材のみで将来仏と決定するのは早計と考える向きもあり、宝冠弥勒像の顔立が非常に日本人好みであり半島には見られないと考える説もある。この説では中宮寺半跏思惟像、夢殿救世観

音、百済観音等一つのグループとして考えている。^(註36) 中宮寺半跏思惟像は珍らしい双髻で蔽手形垂髪や懸裳、光背は竜門様式をとり、広隆寺の北斉、北周様式とは少し異なるのに同グループ内に含めるのは飛鳥時代の主流であった止利様式と相反するもの、非止利様式として様式の違いはあっても一つのグループとしてみなしている。半跏思惟像のほとんどは、この中に含まれると見てさしつかえないだろう。

日本の飛鳥、白鳳の半跏思惟像の宝冠、頭飾はどのようなものであったかを考えてみると、前節の野中寺丙寅年銘像に見られる三面頭飾が多く用いられ、他にも高冠、三山冠などが見られる。高冠は、旧四十八体仏の一五八号と思惟形ではないが半跏像でやはり旧四十八体仏の一五五号と「別尊雜記」の四天王寺金頃の半跏像に見られる。特に一五五号の高冠は上部が三つに分かれた三山冠の影響が見られる。他にも神野寺、岡寺像に高冠の一種を見ることができ

る。三山冠は本来、博山冠と呼ばれ高屋大夫銘像にその基本的なものを見ることができ、他に一五六、一六〇、一六一、一六二号像もこの種の宝冠である。宝冠弥勒像の宝冠はこの三山冠が簡素化されたものと思われる。この三山冠の後に三面頭飾があらわれる。野中寺丙寅年銘像、一五九、一六三、一六四号像等がある。この三山冠と三面頭飾の折衷形式を旧四十八体仏の一七〇像に見ることができ、インドの例や、又後世に弥勒の標識として宝塔を用いたことから宝冠に宝塔のような三角形文様のあるものを弥勒像と判定する説が非常に多い。半跏思惟像の中に、このような文様をつけるものは少なくない。一五五号像、岡寺像、神野寺像に見られ、特に岡寺像

の宝冠は立体的に表わされている。この傾向は朝鮮半島にも多く見られるが、宝塔を示しているとはっきり思われるのは旧総督府博物館像だけである。他はあまりに抽象化されすぎたのか、ただ三角形状に線刻されるものが多い。そのため、この文様は宝塔ではなく、宝冠につけられた房形装飾の簡略化されたものとも考えられる。現に、韓国瑞山磨崖仏の菩薩立像や長野県の寒松院半跏像の宝冠に房形装飾が見られ、岡寺像などはどちらかといえば房形のようにである。そうであれば、弥勒像と判定する基準にはなりえない。このように形態だけでは現在の所、日本の半跏思惟像も全てを弥勒像と断定することはできないと思われる。

第三章 太子半跏思惟像と聖徳太子信仰

一節 太子信仰と半跏思惟像

日本では太子という言葉で考えられる宗教上の人物は悉達太子と



図三 四天王寺金堂救世観音「別尊雜記」

聖徳太子の両者である。聖徳太子信仰は、太子を仏教の擁護者としてみなすもので、天武朝頃からその傾向は見られる。その後九一七年に藤原兼輔の「聖徳太子伝暦」が成り、後世における聖徳太子信仰にも多大な影響を与えた。この「聖徳太子伝暦」が後世の太子信仰にもたらした最大のものは、聖徳太子を救世観音の化身とすることであった。

この聖徳太子信仰のメッカともいえる寺院は、書紀以来太子建立とされた四天王寺である。この四天王寺には聖徳太子に似ているという伝承の仏像が祀られていた。すなわち「御手印縁起」に「金堂内安置金銅救世観音像、百済国王、吾(告)入滅後、恋慕渴仰、伎造顯(贈)之像也。」と述べられた救世観音像である。この像は「別尊雜記」に所載された図(図三)を見ると半跏像である。だが思惟形はとらず、施無畏印を結んでいる。この像に似た作例は旧四十八体仏の一五五像があげられ、この両像は共に高冠、長袖であらわされている。大陸には長袖が見られないので、長袖を着すのは止利派の創作と考えられている。^(注27)この両像は一瞥して明らかに止利様式の造仏とわかる。半跏思惟像がかなり造仏されはじめた飛鳥時代に、やはり隆盛を誇る止利様式の半跏思惟像が現存していないのに、半跏像として残ったこの両像が、共に止利様式であるのはおもしろい現象であると思われる。

さて、第二章一節でも触れたが鎌倉時代に半跏思惟像を救世観音と称することが行なわれていた。先に触れた「御手印縁起」はもちろんで、「大原三千院本堂半跏思惟像胎内納入物」に「南無救世観音」と明記されていることや、「山城州葛野郡楓野大堰郷広隆寺来由記」に現在、「泣き弥勒」と称される半跏思惟像を「救世観音」とある

ことから、それは実証されると思う。しかし、疑問なのは半跏思惟像が弥勒として日本で造仏されたのなら、何故救世観音とそれが呼ばれるようになったのかということである。弥勒と救世観音は明らかに別個の御仏である。故になぜ、鎌倉時代にこうした弥勒像と救世観音像の造仏の混乱が生じたのだろうか。上代まだ宗教的に未発達な時代ならこうした造型上の混合ということは考えられる。現に近年発掘された川原寺の塚仏には、弥勒、阿弥陀を全く同一ともいえる倚座垂脚像を中心とした三尊形式であらわしている。^(注38)しかし、鎌倉時代は宗教的に中興の時代ともいえる。南都六宗の退廃と東大寺焼き打ちによる寺院の破壊、その中からわきあがる法然、親鸞等の新興仏教、武家と結びつく禅宗の渡来など、まさに百花擲乱たる仏教の開花のおり、あまりに教義を無視した造仏が行なわれたとは思えない。

ここで又、四天王寺にたちかえって考えてみよう。四天王寺は聖徳太子信仰のメッカであり、金堂に安置され聖徳太子に似ているという伝承の救世観音は半跏像であったこと。その上、それを伝える文献が一〇〇七年のものであり、この年は「聖徳太子伝暦」で藤原兼輔が聖徳太子は救世観音であると述べた九十年後であること等々。これらを並べて考えてみると、四天王寺像は救世観音であると共に聖徳太子像でもあったかもしれないという想像が頭に浮かぶ。初め聖徳太子像として造仏された半跏思惟像が「聖徳太子伝暦」以降、聖徳太子救世観音という思想が広まり、その後約一世紀を経て聖徳太子像という名称が消え、ただ伝承の中にのみ残され救世観音像という名だけが残っていったと考えたのである。

二節 私見 悉達太子像と聖徳太子像

聖徳太子と半跏思惟像は強いつながりが文献上多く見られる。「諸寺縁起集」の橋寺の条に「金堂一間四面二階救世観音」とある半跏思惟像は「聖嘗鈔」に「又太子御作像、荒陵寺、橋寺、中宮寺等二御坐ス。」と記され、聖徳太子作と伝えられる半跏思惟像もしくは半跏像が四天王寺、橋寺、中宮寺に安置されていたのがわかる。この三寺は聖徳太子建立と伝承の七寺院の中に含まれている。

聖徳太子創建といわれる七寺は文献により少しづつ異なるが「上宮聖徳法王帝説」によると、四天王寺、法隆寺、中宮寺、橋寺、蜂岡寺、池後寺、葛木寺とされており、一応これが定説となっている。ここで先の三寺を除く法隆寺、蜂岡寺（広隆寺）、池後寺（法起寺）、葛木寺について、半跏思惟像の文献、遺像を見て行きたい。

一、法隆寺、これも第二章一節にあげた「聖徳太子伝私記」上巻上宮王院の条に「或云三臂如意輪。一中略一惣太子所造如意輪之形像。」と夢殿救世観音が述べられているが、この像が半跏思惟像と考えられていたことは第二章で述べたとおりである。

二、蜂岡寺、この寺の二体の半跏思惟像はあまりに有名である。その一つである宝冠弥勒像は日本書紀推古十一年（六〇三）の条に「十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊仏像。誰得是像以恭拜。時秦造河勝進日、臣之拜。便受仏像。因以造蜂岡寺」と書かれた尊仏像と考えられている。

三、池後寺、ここにも弥勒像が聖徳太子の追善のために安置されていたらしい。これは「聖徳太子伝私記」の下巻に引用された「法

起寺塔露盤銘文」に「聖徳御分敬造弥勒像一軀。」と創立について書かれていることからわかる。この弥勒像も田村円澄氏によると、半跏思惟像と考えられている。(注40)

四、葛木寺、この寺は現存せず、その所在地についてもはっきりとしていない。ただ、「日本霊異記」中巻、第二十三の「弥勒菩薩銅像盗人所捕示三靈表・顯三盗人縁」によつて、葛木寺にも弥勒銅像があったと知られる。この銅像の形態については全くわからないが、聖徳太子創立とされる七寺のうち六寺まで半跏思惟像、又は半跏像が、太子追善もしくは太子作と寺誌等に伝えられていることから、この弥勒像が半跏思惟像、又は半跏像であつても不思議ではないと考えられる。

ともあれ、こうして聖徳太子ゆかりの寺で太子と強いつながりをもつと伝承された半跏思惟像がまつられたということは、当時太子信仰に半跏思惟像がなんらかのかかわりを、もっていたせいだとは考えられないだろうか。太子信仰に半跏思惟像がかかわっていたこと、そして中世に半跏思惟像が救世観音として造仏されたこと、聖徳太子が救世観音の化身であるという信仰が行なわれたなどの三点をふまえて考えてみると、第一節で述べた理想像が再度頭をもちあげた。そして、聖徳太子像が半跏思惟像で造仏されるに至るその背景には遠く大陸から伝来された悉達太子半跏思惟像があつたのではないかといつたことまで考えるようになった。

「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」天平十九年（七四七）に太子像について興味ある記載がある。

「合仏像玖具壹拾漆軀、丈六即像武軀。

右淡海大津宮御宇、天皇奉造而請坐者。

金涅槃像一具

右不知請坐時也。

宮殿像二具一具千仏像一具

金涅槃像一具。金涅槃像三軀。

金涅槃像七軀。金涅槃像五軀。」

この太子像七軀はどの太子像をさすのかは、明記されていない。しかし、この場合涅槃像一具がすでに書かれており、この中には誕生仏としての太子像が含まれていることは、当然考えられるのでこれは除けられる。

ここで考えられる太子像を列記してみると、悉達太子像、聖徳太子の南無太子像、七歳像、孝養太子像等である。先ず南無太子像は聖徳太子が三歳の時、東にむかい「南無仏」ととなえたという「上宮聖徳太子伝補闕記」に記載された奇異譚によつた造仏である。この南無太子はこの後に成る「聖徳太子伝暦」により太子御時二歳とされ造仏されるようになったものである。「上宮聖徳太子伝補闕記」は延喜十七年（九一七）以降に完成されたものであるから、天平十九年に南無太子像が造仏されていたとは思えない。他にあげた聖徳太子像も「上宮聖徳太子伝補闕記」又は「聖徳太子伝暦」により造仏されるようになったものであるため省くことができよう。

では「聖徳太子伝暦」前に聖徳太子像は造仏されていないのかという点、そうでもないらしい。赤松俊秀氏によると、治暦元年（一〇六五）造立の太子像が鎌倉時代以降、法隆寺の聖霊会の本尊とされていることから聖霊会のはじめられた天平八年（七三六）から太子像がその本尊であつたろうといわれている。しかし、これもまだ仮定の域を出ず、実証はされていない。よしんば太子像が本尊とし

ても、それは画像であったということも考えられるのではないだろうか。

私は以上のことから、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」記載の太子像七軀は悉達太子像でなかったかと思う。もし、悉達太子像であれば、大陸で多く造られ朝鮮半島にも渡来したと思われる悉達太子半跏思惟像ではないかと思う。日本に伝来した仏教が釈迦中心であることは、釈迦の仏舍利を奉安した塔が当初の寺院の伽藍配置で大きな比重を占めていることからわかる。又、悉達太子信仰についても「日本書紀」の仏教伝来の粉本といわれる「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」に仏像と共に「説仏起書卷一箇」が渡来しており、これが本生経(注42)の類であったらしいことから考えられる。田村円澄氏はこれらのことから「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」の太子像は悉達太子半跏思惟像であつたらうといわれている(注44)。

このように悉達太子半跏思惟像が、日本にも伝わっていたと考えたと、聖徳太子と半跏思惟像の結びつきが次のように考えられないだろうか。太子像という名称から上人達は悉達太子と聖徳太子を同列に見たのではないだろうか。彼らは悉達太子半跏思惟像を拝して、聖徳太子をこの御姿で造仏しようと思ったのではないだろうか。四天王寺金堂救世観音と旧四十八体仏の一五五号像に見られる止利式の半跏像は聖徳太子像として造仏されたとは私は考える。救世観音は「聖徳太子伝暦」以降の名称である上に、四天王寺は今まで述べてきたように太子信仰のメッカであり、その金堂内に安置されていたことから四天王寺像は聖徳太子像であると考えられると思う。聖徳太子像として造仏されるので、悉達太子像と区別するため止利派の創作を加えて半跏像として造仏されたのではないかと思

う。

以上仮説ともよべない想像論をつづけてしまった。しかし、日本にも大陸と等しく、弥勒半跏思惟像と共に悉達太子半跏思惟像が渡来していたと考えられるならば、この想像論もそれほどはづれていないと思う。今、日本に残された多くの半跏思惟像は、はっきりいってその尊像名は不明である。ただ野中寺像と高屋大夫銘像が、その銘文によって弥勒像と知られるだけである。まだ、謎は多く残っている。しかし、野中寺像のように突然寺の書庫の中から貴重な造仏例がでてくる可能性は多いので、今後の発見に期待したいと思う。

注

- 1 上野昭夫著「弥勒像の図像学的考察」(塚本善隆博士頌寿記念仏教史学論集)百二頁。
- 2 玄奘三蔵が敦煌に立寄った時、寺に弥勒像が安置されていたと記されている。
- 3 西域巡礼記の条に「玄奘三蔵の云く、西域の道俗はみな弥勒の業をなす」とある。
- 4 「弥勒成仏経」大安二年(三〇三)。
- 5 ○仏説観弥勒菩薩上生兜率天経。(略して上生経)
○仏説弥勒下生経。
- 6 ○仏説弥勒下生成仏経。(略して下生経)。
○仏説弥勒大成仏経。(略して成仏経)。
○仏説弥勒来時経。(略して来時経)。
以上の経典は弥勒信仰の中枢をなす。
- 7 水野清一著「雲岡石仏群」その他より。
弥勒の説法を聞けず化度できなかった人々は弥勒を信じ修業して、弥

勤が人々の救済のため説法を三回行う菴華三会に参加するため、死後兜率天の弥勒のもとに上生することを願う信仰。

8 弥勒下生主石方愷武平二年十一月二十七日用錢五百文買都石像主一区董伏思弥勒下生閃州騎兵參軍倉州洛陵縣令董相勝弥勒下生主董通達。

9 菴華三会に値遇したいとだけ望み、その下生の時を現在と考える現世的信仰。

10 雲岡石窟中最も年代の古い第十六洞から二十洞までをさす。開窟に尽力のあった沙門統(大司教的立場)の墨曜にちなんでいる。

11 太和十六年陰密異郭之慶等の碑像。

12 龍門第十七洞をいう。十四洞と共に五二三年～五三〇年頃の造案。

13 「天保十年比丘惠祖等造竜樹思惟像」と「武定五年豊樂七帝二壽昌義人等造白玉竜樹思惟像」をあげることができる。

14 注7を参照。

15 三品彰英著「新羅花郎の研究」(三品彰英論文集第三卷)

16 田村田澄著「半跏思惟像と聖徳太子信仰」(新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化)六四頁。

17 小林剛著「大秦広隆寺の弥勒菩薩像について」(史迹と美術一七六)。

18 水野清一著「飛鳥・白鳳仏の承譜」(仏教芸術四)。

19 町田甲一著「法隆寺伝来の小金銅仏と辛亥銘観音菩薩立像について」八三頁。

20 藤沢一夫著「鹿深臣百濟将来弥勒石像説」(史迹と美術一七七)。

21 注と同じ、八十三頁。

22 眞済の都城廻辻。聖玉十六年に熊津城より遷都と「三國史記百濟本紀」第四に記載。現在の忠清南道扶余郡扶余面。滑石仏像発見遺蹟七ヶ所は半跏思惟像三体(一体推定)、菩薩立像三体、如来像三体(一体座像)其他一体という内訳。

23 注と同じ、八十五頁。

24 ○聖徳太子伝暦、延喜十七年(九一七年)

○七大寺巡礼私記、保延六年頃(一一四〇年頃)

○諸寺建立次第、建保四年(一一二六年)

○建久御巡礼記、建久二年(一一九一年)

○阿婆縛抄諸寺略記、弘安二年(一一七九年)

○諸寺縁起集(菅家本)

○泉高父私記(上宮太子拾遺記第二卷所引)

○元興寺伽藍縁起并流記資財帳、長寛三年(一一六五年)

○太子伝古今目録抄。

○仏法伝来次第。

○聖徳太子平氏雜勅文、正昭三年(一一三四年)

○伊呂波字類抄抄。

○南都七大寺巡礼記、康正、長祿年間(一四五五～一四五九年)

○扶桑略記。

○諸寺略記。

○帝王編年記、正安頃(一一九一～一二〇一年頃)

○南都元興寺由来。

○多武峯二十六勝志、安政四年(一八五七年)

注20と同じ、藤沢氏の実測による。

25 信仰・寄進のための宗教集団と考えられる。

26 橋寺の他、楯寺(道明寺)、海会寺・長寺又は野中寺の古名とする説もある。海会寺説については、福山敏夫著「野中寺弥勒像銘文中の柏寺」(史迹と美術二〇八)があり、橋寺説は敷田嘉一郎著「銘核小考」(史迹と美術一七一)に述べられている。

27 菅沼貞三著「弥勒菩薩像「野中寺蔵」」(美術研究)65)

28 田中貞著「田天皇をめぐる諸問題」(日本学土院紀要九ノ二)

29 速水侑著「弥勒信仰―もう一つの浄土信仰―」五十頁。

30 注19と同じ、八十七頁。

31 七世紀中葉に伝来したペルシア系文様。連珠文のあらわれる早い例としてあげられる。

32 敷田嘉一郎著「丙寅年高屋大夫造像記考釈」(美術研究一四八)十頁。

33 石田尚豊著「飛鳥・白鳳時代の小金銅仏」(法隆寺小金銅仏、奈良の寺シリーズ七)

- 35 町田甲一著「上代彫刻史上における様式時期区分の問題」(上代彫刻史の研究)
- 36 注35に同じ。
- 37 注18参照。
- 38 「川原寺裏山出土の埴仏と塑像」六頁。
- 39 実際には聖徳太子創建とは考えられないものが多く、説話として取り扱われている。「上宮聖徳法王帝説」以外にも、「聖徳太子伝暦」、「扶桑略記」、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」等にも記載されている。
- 40 注6と同じ、八十四頁。
- 41 赤松俊秀著「鎌倉仏教の研究」
- 42 釈迦が如来となるため悉達太子以前にも善行をつんだ説話をのせたもの。「太子瑞応本経起」、「修業本起経」等がある。
- 43 注16と同じ、五十五頁。
- 44 注16と同じ。

跋として

弥勒半跏思惟像の流れを追いたいと始めたこの論文も、知らぬ間に広範囲にわたってしまった。当初の飛鳥から天平あたりまでという考えは、全く安直なものだったとつくづく思い知らされる。調べていくうちに、段々時代が広がり、自分の考えや史料が収拾のつかなくなっていくのに、我ながら驚いたり、あきれたりして日々が過ぎたようだった。まるで、ドロ沼にはまりこみながら、ようやく書き終ったというのが実感である。第三章は、そんな状態の最も著しい頃に書いたため、仮説にもなっていない。想像の産物でしかないとのそしりをうけても仕方がないと思う。しかし、この想像論を基に今後の課題として日本における半跏思惟像を勉強してみたいと思

っている。

この論文がまがりなりにも出来上ったのは、色々と怠惰な私をはげまして下さった諸先生・友人達のおかげである。特に在学中より懇切丁寧に御指導いただいた三山進先生、大西修也先生に深い謝辞をささげたい。

参考文献

単行本・論文集

- ・速水侑著「弥勒信仰—もう一つの浄土信仰—」(日本人の行動と思想十二)評論社。
- ・林幹弥著「太子信仰—その発生と発展—」(日本人の行動と思想十三)評論社。
- ・松原三郎著「東洋美術全史」。
- ・関野貞著「朝鮮の建築と芸術」。
- ・田村円澄著「半跏思惟像と聖徳太子信仰」(新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化)吉川弘文館。
- ・三品彩英著「新羅花郎の研究」(三品彩英論文集第三卷)平凡社。
- ・中吉功著「新羅・高麗の仏像」二女社。
- ・町田甲一著「日本古代彫刻史概説」中央公論美術出版。
- ・町田甲一著「法隆寺伝来の小金銅仏と辛亥年銘観音菩薩立像について」(上代彫刻史の研究)吉川弘文館。
- ・上野照夫著「弥勒像の図像学的考察」(塚本善隆博士頌寿記念仏教史学論集)一九六一年。
- ・水野清一著「半跏思惟像について」(中国の仏教美術)一九六八年、平凡社。
- ・水野清一著「倚坐菩薩像について」(中国の仏教美術)一九六八年、平凡社。

- ・長広敏雄著「雲岡と竜門」。
- ・石田尚豊著「飛鳥・白鳳時代の小金銅仏」(「法隆寺小金銅仏」奈良の寺シリーズ七)。一九七四年。岩波書店。
- ・井上秀雄著「古代朝鮮」(NHKブックス一七二)日本放送出版協会。
- ・宇野茂樹著「近江路の影像」雄山閣。
- ・藤田経世編「校刊美術史料」(寺院編上巻)中央公論美術出版。
- ・大日本仏教全書(史伝部第六二・七一巻。寺誌部八三・八四・八五巻)「日本書紀下巻」(日本古典文学大系六七)岩波書店。
- ・東京国立博物館編「法隆寺献納宝物目録」定期刊行物・展示会目録。
- ・水野清一著「飛鳥・白鳳仏の系譜」(「仏教芸術四」東京)。
- ・藤沢一夫著「鹿深百濟将来弥勒石像説」(「史迹と美術一七七」京都・一九四七年)。
- ・松原三郎著「飛鳥白鳳仏と朝鮮三國期の仏像」(「美術史六八」東京・一九六八年)。
- ・藪田嘉一郎著「丙寅年高屋大夫造像記考釈」(「美術研究一四八」東京・一九四八年)。
- ・田中嗣人著「八世紀前半に於ける聖德太子信仰の実態」(「古代研究十一」奈良・一九七七年)。
- ・井上正著「中宮寺半跏思惟像について」(国華・一九)。
- ・飛鳥資料館編「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」一九七六年。
- ・奈良国立博物館編「日本仏教の源流」一九七八年。
- ・「川原寺裏山出土の埴仏と塑像」一九七六年、飛鳥古京顕彰会。
- ・東京国立博物館編「韓国美術五千年展」一九七六年。
- ・藪田嘉一郎著「銘刻小考」(「史迹と美術一七一」京都・一九六六年)
- ・毛利久著「白鳳彫刻の新羅的要素」(「新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化」吉川弘文館)
- ・小林剛著「太秦広隆寺の弥勒菩薩像について」(「史迹と美術一七六」)